



# 蛸親爺

## 第6話 奉納の踊り

雅<sup>がうん</sup>雲すくね

『カットのみに二千円 親切丁寧』と床屋に出された看板を、着流しのお爺さんが腕を組んで見下ろしている。

商店には軒並に提燈が吊られ、祭囃子が晴れた空へ上がって、浴衣の小さい人が万灯を持って小刻みに駆けて行く。

店先には空の台が出され、脇に鉄板やガスボンベが立つ。

塩漬けの鰹が下がる平屋の軒先では、背広を取った眼鏡の親爺が、綿飴作りに似た筒状の器械の前で、部下の男と話し込んでいる。こちらは粗い縞の背広である。まわりでは、揃いの生壁色のポロシャツを着た若い者が五人立ち、話を聞いている。

「たーこたーこ。たーこたーこ」と蛸は祭囃子に包まれて商店街に行く。

「おう、会長。このあいだは券ありがとな」

「ええ、蛸の旦那。こりゃ、ごきげんですな」

「今日は祭りだね。あとで一杯やりに来るよ。焼き鳥とか出るんでしょ」

「あ、そうそう。ちようどよかった。時間あるなら、手伝ってもらいたいことがあって。水風船とか射的の店番」

「的<sup>てしや</sup>屋かい」

「もちろん、日給出しますよ。ほかのバイトと同じ一万円」

「やるやる」と蛸は足を次々と差し挙げる。

「じゃあ、分担を決めよう。水風船に三人。経験者は」と会長が目配れば、男一人に、女二人が手を挙げた。

蛸はその三人をたまげたけしきで見た。

「残りの三人を射的、巨大ガラポン、ブローアー籤に分けるから」

「会長、射的はわかるが、その何だ、プロなんとかってえのは」と蛸が聞

く。

「ああ、ブローアー籤ってのはこれ。これに三角籤を入れてつかみ取ってもらうんですよ」と目の前の綿飴作りの様な器械に手をやる。

「ガラポンってのは器械を回転させて玉を出す籤で、その大きいやつ」と商店街の向こう並びを指した。

射的とガラポンは、『田作』と看板を出した蒟蒻屋の前に設置してある。射的の雛段を設えた隣に、平太鼓を起してハンドルをつけた様な柿色の物がある。蒟蒻屋はビルになっていて、前に長い日陰を作っていた。

「へえ。あれこれあるんだね。食い物はないの」

「食い物は商店街の人がそれぞれやってるからね。うちではこういう器械を使う物だけ」

「僕は射的がやりたいです」と男が手を挙げた。

「じゃあ、私はガラポンがいいです」と女が手を挙げる。

「あっそう。わけなく決まってよかった。じゃあ、蛸の旦那はここで」

「そうか。任せときな」

ブローアー籤は、平屋の玄関前に出されていて、器械を筒状にかこむ透明の樹脂板が日差しを照り返している。

「今は日が当って暑いけれども、午後になればこっちが日陰になりましょうから。旦那もその方がいいでしょう」

「そうだな。乾いちまったら大変だからな」

「それじゃ、皆よろしく」と会長は去る。

「じゃ、お願いします」と言ったのは背広の若者で、「少し、ここで準備しますので」とまわりに置いた段ボールの箱を開け始める。

蛸も開けて、「おっ花火だ」

「景品ですよ。その小さいセットは二等です」

若者は蛸の傍らの箱を開けて、「こっちの大きな花火セットが一等です。さらに特賞がこの特大花火セットです」と一斗缶ほどの缶詰を出した。

「大きいね。これ花火が詰まってるんだ」

「そうです。特賞は二人だけです」

「そーいや、籤、籤って言っていたけれど、これ籤なの」と器械を覗き込

む。

「ブローアー籤って言いまして、この器械に三角籤を入れて、下から風を送って、舞い上がった籤をつかむんですね。横の穴から手を入れてもらって」

「へえ」

「手順としては、お客さんがこういった籤の参加券を持って来ますから。それを受け取ったら、籤を一回引かせて賞品を渡して下さい」と祭のチラシを見せた。チラシの端に点線が入って射的や、ブローアー籤などの参加券がついている。

「あ、何だ。料金を取るんじゃないんだ」

「そうなんですよ。料金を取ると手間が増えますし、ただなら、賞品について何も言いませんから」

蛸の後ろには、一等と二等、その他の券を分けてある竹籠が机の上に並び、籤の器械の脇には段ボールの箱に、花火以外の景品がまとまっている。「それと、この風車かざぐるまとほおずき提灯と小匙がはずれの景品です。好きなものを選んでもらって下さい」と開けた箱から小匙の山を見せた。

「そう、わかった」

蛸は提灯の箱から一張を取り、伸ばしたり縮めたりしている。

「どうも、どうも」と会長がやって来た。

「これ特賞」と二枚の三角籤を蛸に握らせる。

「加減して出して下さい」

「おう、わかってる。わかってる。配分な」

会長は去る。

蛸は受け取った籤の一枚を、竹籠が並ぶ隙間に挿し入れた。残りの一枚は空の器械の口に入れた。

「そういや、兄さんは商店街の者には見えねえけれど」

「ああ、私は広告代理店の者なんですよ。この祭りを依頼されてまして。社長はこの商店街の会長もしています」

「あ、何だそうなのか。近頃じゃ代理店がからむんだ」

「多いですよ。お祭りも昔は夜店を出すくらいでしたが、最近はかれこれ

とイベントを行う様になって、この籤も射的も会社から持ってきた物です」

「ああ、じゃあ会社の備品なんだ」

「そうですよ。あと、着ぐるみとかモグラたたきとか、種々揃っています」  
「こういったイベントも広告宣伝の一種ということだろうね」

「ああいう、旗なんかも調えるんです」と街灯に飾った商店街の旗を指す。

「へえ」

「商店街のほかにも、スーパーのイベントを依頼されます。まあ、その方が多いんですけどね。ヒーローとの握手会とか」

「ああ、ああいうのも裏で代理店が働いてんだよな」

「普通の商店街だと、ヒーローを呼びたくても、連絡先がわかりませんか  
らね」

「違うな」

「まあ、まだ時間がありますから、ゆっくりやりましょう」

段ボール箱を開けていると、着流しのお爺さんがやって来てブローアー籤の前に立った。腕を組む。籤を見下ろす。蛸は段ボール箱を端に寄せる。広告代理店の従業員は帳面に数字を書き入れる。お爺さんが腕を組み直す。口を開けた。

「綿飴まだなの」

「これは綿飴じゃなくて籤なんですよ」と若者が答える。

「え、綿飴じゃないの。何だ綿飴じゃないの」

そう言って、お爺さんは歩いて行った。そうして、そのまま商店街を出た。

商店街を三十恰好の男が自転車の二人乗りで去る。

蛸と若者は竹籠から籤の束を出して、器械に入れる。高くなった日に、蛸の影が濃くなる。

「ちよっくら店構えを見てくるわ」と知らせて、蛸は向かいのコンビニの日陰に立った。

若者が器械のスイッチを入れると、籤が浮いた。三秒ほど浮いたかと思えば降り積もり、底のプロペラにからまった。三角籤の山がぐるぐる回

る。蛸が戻って来た。

「本当はもっと軽い紙を使ってやるんですけどね。これは箱から手でつかむ三角籤そのものだから、一枚一枚が重過ぎて浮遊しないんですよ」

「うん、どうしたらいいだろう」蛸は腕を組む。

会長が来て、「もっと籤くしゃくしゃにしないと」と歩きながら教えた。教えて行き去る。会長のあとから、二枚目の兄さんと姉さんがついてくる。通りしなに、「おつかれさまです」と笑顔で会釈をした。

「あ、あ、こりゃどうも」と蛸も挨拶をした。

「今の人たちもアルバイトかい。男前だったねえ」

「あの人たちは、的屋のアルバイトではありませんよ。あとで登場します」

「あ、そう。そういや、会長が籤をくしゃくしゃにしるとか言ってたね」

「まあ、やってみましょう」

広告代理店の従業員が穴から手を入れて、筒の底に積もる籤を握りしめた。鼻紙の様になって籤が浮く。

「本当だ。しかし、くしゃくしゃになった籤はどうかね」

「すいませんいいですか」とすすきの様な大人が来た。手には参加権を握っている。

「ああ、あいよ。いらっしやい」

「それでは、その穴から手を入れて、籤を一枚取って下さい」と背広の若者が客に言い、蛸には顔を向けて、「これ、金券と同じ扱いですので、まとめて置かせて下さい」と受け取った券を菓子箱にしまった。

客は手を入れて、腕は動かさずに掌を開いたり閉じたりして、つかむというより、手に入り込むのを待っている。そうして客がつかんだ籤を蛸が受け取って開けた。

「お、二等だよ」

「それでは、こちらになります。おめでとうございます」と背広の若者が、小さい花火セットを渡した。

トマトの様な顔の幼児がお爺さんに連れられて来た。ブローアー籤の器械には穴が二つ空いている。

幼児は低い方に手を入れた。今しがたの大人と同じくそのまま手をグーパーしている。

「小児はわかるが、大人も手を入れて、掌を結んだり開いたりしてるな。箱が透明なんだから、見定めてつかめばいいんじゃないか」

「きつと、箱に入ったおみくじを引く感覚なんですよ。まあ、なんとなく、宙に浮かんだ籤が掌にのったという感じの方が楽しいんじゃないですか」

客が十人来たあたりで、籤が浮遊しなくなった。紙屑が山積みになって回り続ける。甘栗屋の様である。枯葉が吹き募ったかの様でもある。

「どうしたものかね」

「どうしましょうか」

林檎の様な顔をした小児が来た。

「手を入れて、一枚取って下さい」と背広の若者が引き方を伝えた。

小児は回る三角籤から一枚取って蛸に渡す。

「おお、特等だよ。おめでとう」

「ありがたい」と一斗缶を抱えて帰った。

「特等が出たな」

「そうですね。しかし、焦げ臭いですね」

「そーいや。どうも、器械からしないか」

「モーターが変になったかもしれないですね」

籤の横には『ヒーローとじゃんけん大会』と広告された看板が立つ。『レッドに勝てば賞品』ともある。

広告代理店の社長兼商店街の会長がやって来て、「また時間変っちゃったよ」と看板を上からつかんで自分に向けた。

『開始時間二回目五時半より』とある処に紙を重ね、ポケットから出したマジック片手に五時に変える。

「六時から盆踊りがあるからね。ヒーローに客が流れちゃ、かなわないんだよね。商店街としては盆踊りがメインイベントだし、皆が盆踊りに加わるか、見てもらいたいから」と蛸に向かって腕を組む。

「五時だの六時だの、客は逐一見に来てはなかるうに、遅れるならともかく、早めちゃったらば、時間通りに来た客にまで景品が行き渡

るのかい」

「そこはこれ」

会長が段ボール箱の下から引き抜いた呼び込みチラシには、『五時半ごろより』と記してある。

「なるほど。『ごろ』ね」

「こういう企画は盆踊りのための人寄せなんだよね」

商店街に流れる祭囃子にかぶさり、ヒーローの主題歌が響きだした。

往来に行く人々が、ヒーローのじゃんけん会場に並び始める。蛸のいる平屋の隣は、草に蔽われた空地面である。祭に来ている人々が、その前の道端におしなべて並ぶ。籤は一休みである。籤が浮遊せぬから、店を開けている様にも受け取れない。ただ焦げ臭い。

蛸と会長と若者が黙って、何とも言わなくなってしまったところに、「よろしくお願ひします」と弾んだ声を投げかけて、光沢のある白い服から白い脚と腕を出した女の人が来た。籤の下に荷物を置く。口の開いた透明の四角いバケツの様な靴である。

続いて蛸の目の前を赤いものが通った。ヒーローがマントを靡かせて、会場へ向かう。ヒーローは五人組であるが、祭りはレッドの単独参加である。

司会役のお姉さんが、マイク片手に、「みんな、今日は、レッドが来てくれました」と見物の一人一人に呼びかける調子で話し始めた。

「では、レッドです」

ヒーローが列をなす小児等の前に跳躍して登場した。左手を斜めに突き上げ、右手を交差させ、片膝を曲げて、一方の膝を横に伸ばす。起き直ると、両手両足を揃えて会釈をした。

「それでは、じゃんけん大会を始めます。いいですか。じゃんけん」

お姉さんの合図に、ヒーローと列の頭の男の小児とが構える。

ヒーローはパーを出した。小児はグーである。

「ああ、レッドの勝ち。ごめんね」と参加賞の小匙を渡す。

ヒーローは小児にお辞儀をした。

じゃんけん大会は続く。ヒーローは身のこなしのみで、口は利かない。

「レッドまた勝っちゃったね」「それじゃ握手しようか」「あら負けちゃった」とお姉さんが代弁して行く。

レッドはお姉さんの話に合わせて、頭を手で搔いて見せたり、手を差し出したり、ずっこけたりと動きで補う。

蛸が背広の若者に話しかけた。

「じゃんけん大会は先着百名と案内ビラにあるが、付き添う大人を足しても、目の子勘定で七十人か」

「そうですね、ヒーローとお姉さんには早めに引き上げてもらおうみたいですね」

「やっぱり小児が少ないなあ」とブローカーに返ってきた会長がこぼす。

「こっちも見物させてもらった」と蛸が器械に手を置く。

「二回目は大人も参加してもらおうか。そうだ。一時近いし、商店街の事務所に昼飯置いてありますから、どうぞ」

「そうかい。それじゃ頼むわ」と蛸は隣の事務所へ行く。

アルミの扉を引いて入ると、壁際に商店街の旗や作り物の花が積まれている。大机がまんなかになり、弁当と飲み物が置いてあった。

端に大袋があって、空になった弁当箱が溢れている。

蛸は残っていた弁当の蓋を開けた。

弁当箱には紅鮭が赤く横たわっていた。蓮根煮に竹輪が一切れ入っている。竹輪の揚げ物と竹輪と胡瓜のサラダも添えてある。

蛸は割箸を割って、黙って食った。

十分で済ませて、籤の店番に戻る。焦げた臭いのする器械と鯉の下がる家の間に納まる。

向かいにはコンビニである。コンビニでは眼鏡の店員が店先に出て、鉄板の上でフランクフルトを転がしている。転がすのにあきると、前を向く。

向かう先には蛸がいる。まばたき一つせぬ蛸と眼が落ちあう。合っては逸らして、フランクフルトを転がしている。雨が降ってきた。

景品の火花に雨粒が当たる。

段ボール箱に入れたまま陳列しているから、雨よけも箱の蓋を閉めるだけで済む。



蛸は背にした平屋の軒先で、十本の鯉越しに雨の斜めに降る様を眺めた。走る者はない。傘のない者も歩く。

ブローアー籤の円筒状の器械には、手を入れる穴が上と下とに並んである。穴は切れ目の入ったゴムがはまっている。流しの排水溝を塞いでいる類の物である。

筒のなかでは籤が回る。

蛸は思いついて、高い方の穴から細長いボール紙を挿し入れた。籤のからまるプロペラを押して勢いをつければ、籤が浮かび上がった。三秒ばかり浮いて降り積もる。

雨が小降りになって、小児が籤を引きに来た。小児には低い穴から取らせる。蛸が上の穴から腕を差し入れて、ボール紙でプロペラを回す。籤が浮かぶ。それを繰り返す。小児は花火を両手で支えて帰る。雨が上がった。

「しかし、腕が穴に擦れて、ちいとばかり赤くなってきたな」と蛸は足をさすった。

蛸は、穴を塞ぐゴムを払げて、ガムテープで器械の壁に貼りつけた。開け放たれた穴から、籤が飛び出した。

「あわわ。こりゃいかん」とテープを剥がした。

「何か、こう、腕章みたいな物はないのかね」

三時過ぎに蛸は、「お茶をどうぞ」と促されて商店街の事務所に戻った。司会のおねえさんとヒーローがいる。

「ありゃ、こりゃどうも」

「おつかれさまです」と二人が会釈した。

二人はアルバイトや商店街の者が休憩に使うまんなかのテーブルから離れ、端に寄せた畳み椅子に腰をかけ、それぞれも間を保っている。

蛸はテーブルのスポーツ新聞を払げた。

お姉さんは化粧中である。棚に置いた小鏡を見ながら、目のまわりをぐりぐり塗っている。

ヒーローは着替え中である。はめた手袋をかざして、開いては握っている。

お姉さんが、「もう着替えるの。早いのね」と声をかけた。

ヒーローは『スーツ』に腕を通しながら、「ええ、練習しておきたいですから」と敬語を用いた。

お姉さんは化粧道具を置いて、立ち上がる。

「チャック上げてあげる」とレッドのせなかにまわり、チャックを閉めた。

お姉さんは再び化粧台の小さい鏡を覗き、今度は頬を塗り始める。

面をつけぬレッドがその向こうで、鋭く手を突き上げた。ただちに振り下ろし、足を伸ばしては縮めて、きれぎれのコサックダンスを思わせる動きをしている。

通りに満ちる神楽の太鼓の音に、化粧ブラシを肌を滑らせる音とレッドの衣擦れの音が重なる。蛸は、磨ガラスに金文字で『芋掘商店街事務所』と書かれた戸に赤い色を浮き立たせて、新聞をめくる。

野球の記事を一通り読んで、蛸は出る。出る際に、お姉さんと顔だけ変身していないヒーローが、「おつかれさまです」と後ろから言った。

蛸は肩越しに会釈をしつつ、「あ、おつかれさん」

戻ればワイシャツ姿の社員がネクタイを外し、袖をまくった姿になっていた。顔が赤くなっている。

「籤を半分にしました」とくしゃくしゃになった籤の入ったビニール袋を見せる。

蛸が器械の方を見れば浮いていた。浮いてはいるが、二十枚も入っていない。浮いているというより、一度底のあたりまで下がった物が吹き上げられているのである。

「このプロペラがですね。モーターとの摩擦がなくなると、空回りしてしまうんですよ。止まったら、ちよっと持ち上げるとまた回ります」と穴から手を入れてやって見せる。プロペラの竿をつまんで持ち上げた。

「へえ、そういうメカニズムなんだ」

しかしプロペラはまた止まる。籤は底に溜まる。焦げ臭くなる。

そこに会長が来て、「何だか焦げ臭いな」「モーター焼けてんだろ」「客の来ない間はスイッチ切っといういいよ」と立て続けに言って去る。

「じゃあ、お客さんのいない間はスイッチを切っておいて、来たら入れる

ことにしましよう」

「この器械いるのか」と蛸が言う。

「盥たらひを持ってきて上から降らせましようか。紙吹雪みたいに」と社員も言う。

言って、「ちょっと見てきます」と水風船の出店へ向かった。

蛸が腕を入れてプロペラの軸の加減を整えているうちに、プロペラが抜けた。目を凝らしてプロペラの竿を穴に差し込もうとしたが、思う様にはまらない。ところに、籬が浮かびだした。そのまま浮遊している。

「何だこりゃ。浮遊しなかったのは、このプロペラのせいじゃねえのか」

蛸が額を押しあてて窺えば、底に張った網の下に、風を送る扇風機が回っている。

「こんな飾りのプロペラなど外して構わないだろ」と回らぬプロペラを外して、籬は浮いた。しかし浮くのは二十枚がせいぜいであった。

桃をあしらった浴衣の小児が靴を鳴らしながら来た。

「籬やります」

籬は浮いている。蛸はボール紙でかき混ぜずに済むが、小児が取れない。疎らに舞い乱れる二十枚の籬をつかもうとして、小児の小さな手は空振りをする。籬が掌をすり抜ける。体を横にしたまま笑って、付き添うお祖母ばあさんを見上げている。

「待っていない。景気よくしてやるから」

蛸は百枚近くも上の穴から放り込んだ。小児はつかんで一等である。

客が来たらスイッチを入れる。高い穴からボール紙を差し入れる。塵取りの要領ですくい上げれば、籬は落ち葉の様に舞い落ちる。それを客がつかむまで繰り返し返す。

そうして小児の来るたびに、蛸が横から手を入れて、すくい上げる方式で落ち着いた。

日は傾き出して、雨のけしきもない。

会長の計算では日陰になっているはずが、平屋であれば影が伸びてこず、籬の器械も段ボール箱も日にさらされ続けている。

蛸は客の来るたびに、段ボール箱でかこった一角で、ボール紙で作った

篋を器械の穴から突っ込んでまぜ上げる。枯葉の山を崩すごとくに。

やがて夕靄に包まれて行く商店街に、浴衣を着た老人や中年や青年があちからちからも現れた。

籤はしまいである。

横にした籤の器械を転がしてトラックに積む。祭囃子の音がやみ、音頭が鳴り始めた。踊る人々が同じ間隔を空けて並び始める。その場で簡単な踊りを始める者もある。傍らでは、蛸たちが踊らんとする人々を避けつつ、往来の端を行きつ戻りつ、景品の入った段ボール箱を運ぶ。また担ぎ上げる。電信柱にとまった日暮しが鳴いた。

東京音頭の響きが大きくなり、浴衣の人々が列をなして歩み行く。太鼓がどんと鳴る。

「それでは、このまままっすぐ大通りを渡ってお寺に入ります」とのアナウンスで、商店街の突き当たりにある寺の山門をくぐる。踊りながら。笑いながら。

山門の内です踊りの輪は廻る。

「小川さん、通るかと思っただが来ねえなあ。まあ帰るか」

蛸は給料袋とともに貰った笛に息を吹き込んだ。麦笛に似た音を出して、ぜんまいの笛が象の鼻の様に伸びて巻き戻った。

「たーこたーこ。たーこたーこ」と八本の足がうねりを打って揺れている。

月下です踊る蛸の影が水溜りに映じて揺らめく上で、日暮しがまた鳴いた。

七月の夜は三日月の空に更けて行く。

〈つづく〉